

おにび
見えない日本の旅日誌

アトリエ銭湯
絵と写真 セシル ブラン
脚本と彩色 オリヴィエ ピシャール

この物語は、何度か訪れた日本旅行のうち、2014 年秋の出来事に着想を得ています。

この物語を私たちがその時に会った人たちに捧げます。誰もが私たちを気前よく出迎え、自分たちの住むところやそこに隠された謎を私たちに見せてくれました。そのうちの何人かはこの本の中に登場します。その人たちに楽しんで読んでいただけるといいのですが。

この作品の制作中に、私たちを励ましてくれた私たちの家族や友人たちにも感謝しています。

セシルとオリヴィエ

[日本…]

[夏の終わり。]

[新潟県、その田んぼは海まで広がっている。]

[猿和田は、山の麓にある小さな村…]

[こんな雨の日は世界から切り離されているようだ。]

「何買ったの？」

「中華まんとかロッケ。」

「無駄足だったみたい…

お店の人に聞いたら、今日はお祭りないって。」

「うん、うまい。あったまる。」

「雨止むみたい。」

「でもホームページで見たんだけど。」

(ボン、ボン、ボン)

「もしかしたら日付を間違えたのかも。」

「あー、なんだこの雨。
セーター着てくればよかった。
昨日はあんなに暑かったのに。」

「あ、見て！ 僕、間違ってた。」

(ボン)

「ついていかない？ はぐれちゃうよ。」

「大丈夫。あまり遠くには行かないよ。
小さい村だからね。
あとで追いつこう、
それよりも…」

「この店の中を見たいな。」

「わー、すごい寒い、ここ。」
「古い家だからね。」
「湿気がこもるんだよ。」

「こんにちは。」
「...」

「あの、中古カメラを
扱っているようですけど。」

「ポラロイドを探してます。
写真がすぐ出てくるやつ
です。」

「そこにあるのは安物だよ。」

「いえいえ、
とてもいいものが
あります。」

「もっといいのあるよ。」

「二眼レフカメラ？
こういうの、
もう持ってます。」

「こいつは特別だよ！
坊さんが磨いたレンズが付いてるんだ。
妖怪が撮れるんだよ。」

「それをたった 500 円で売るんですか？
少なくともプラスチックじゃないですよね？」

「日本製のいいプラスチック
使ってるんだよ。」

「で、フィルムは何でもいいんですか？」

「いやダメ！
フィルムも特別な使わないと。
これ滅多にないし、すごく高いんだよ。」

「でも安くしとくよ。
カメラもついて、たったの 1 万円。」

「よし、買った！」

「どうしたの？
催眠術にでもかかったの？」
「取引したんだよ。」

「ひっかかたね、うん。」

「あっ！」

「何？」
「いま、外で雪が降っている
みたいな気がした。」

「だろうね、凍えそうに寒いもん、ここ。」

「ふー、ほらまた降り出した。」
「さあ、ぶつぶつ言うのはやめて、駅に戻ろう。」

「わああー、ついてない！」
「次のは小1時間後か。
ここで待つ？」
「雨は防げるよ。」

「私たちと一緒に電車を待ってる
お化けがいると思う？
あのカメラ使ってみようかな…」

「フィルム無駄にしない方がいいよ。
暗すぎる。」

「またチャンスあるよ。」

「それもそうだね。」

妖怪カメラ

使い方

簡単 !!

ファインダー

1. 妖怪を狙って
2. シャッターを押し
3. フィルムを巻く

フィルム送り

気づかれずに撮影できる最新テクノロジー

シャッター

僧侶研磨の好感度レンズ

普通のカメラだと
妖怪に警戒されますが…

この妖怪カメラでは、
あなたが見ていない時に、
妖怪はあなたに
悪ふざけしようとします。
カチャ
そこがシャッターチャンスです！

8枚撮り！

D800 天狗シルバー
妖怪撮影公式フィルム

プロのアドバイス
東京大学 高田教授

1. 敵を知ること。私が書いた妖怪辞典（3,200 円＋税）は理想的な教科書です。
2. 獲物をおびき寄せるための良い餌を見つけること。妖怪は食いしん坊ですから、慎重に！
3. 目立たないようにして、決して標的を目で見ないこと。フラッシュもお勧めしません。
4. 撫でたりしないこと。どんなに妖怪が可愛くても。

超自然波に感光

「ああ、」

「やっぱり天気がいい方がいいな。」

① 内野の狐

「？」

「何やってるんだろう？」

「何か探してるの？」

「しー！
お化けの写真撮ろうとしてるの。」
「家の中にいるかな。」

「庭に行きなよ。
蜘蛛がいっぱいだ。」

「たぶん、庭師のお化けが見つかるかもね。」

「見て…」

「ただの古い人形だよ。」

「藤原さんちにはお化けはいないよ。」
「古い土産物だけだ。」

「じゃあどこで見つかるの？
私のカメラ使わなきゃ。」

「マルグッタで聞いてみよう。
あそこの人たちはずっと新潟で
暮らしてるから、
きっと知ってるはずだよ。」

[マルグッタ 51 は喫茶店で、レストランで、床屋で、アートギャラリー。私たちは前に新潟に住んでいた時からの、その常連さん。]

[ここ経営している退職したご夫婦は、新潟にやってくるお金のない学生たちを集めて、せっせと彼らに食べさせて太らせてるけど、それがどういう魂胆なのかは、いまだに謎。]

「馬場公輔、店主。お茶を入れて、客とおしゃべりする。」
「その妻、澄江。料理をして、髪を切る。」

「結局、私たちは皆、マルグッタの虜なのだ。」
「アパートが寒すぎるから、毎日ここに勉強しに来るんだ。」
「チグ グック、韓国」

「研究室では僕はひとりぼっち、僕以外はみんな日本人。ここに来ると、いつもブラサンスをかけるんだ、落ち着くから。」
「ブノワ、フランス」

「留学が終わって大学寮を出なくちゃいけなくなって、でももう少し新潟にいるから、ここで居候させてもらってるんだ。その代わりに店を手伝ってるんだよ。」
「ファフリ、トルコ」

「で、お前らは？」
「僕たちはもっとひどいよ、
日本にくるつもりなかったんだから。」

「1ヶ月前、フランスでは…」
「あ！ マルグッタからメッセージだ。
やさしい、フランス語で書こうと
してくれてるんだね。」

「さあ訳せ、
『来月のこと
さもないと食事は
解決したぞ、
やらん。』
家が見つかった』
「この前メール書いた時、
日本語まちがったかも。
私たちが新潟に
戻ってるんだ！」
「来月、
何かあるの？」
「無難に断るか…」

「で、何て
言ってるの？」
「この人たちから逃げられる人なんて
いないよ！」

「さあ、セシル、
オリヴィエ、
何食べるんだ？」

「自家製ラッキョウ漬け、コリコリして甘い。」
「新潟米は日本一、真珠みたいで風味豊か。」
「舌でとろけるほど煮込んだ肉。」
「香辛料と果物の香りの玉ねぎルー。」

「これだよなー、このためにフランスから
遠路はるばる戻って来たんだよね。」
「飛行機 14 時間、電車 3 時間、
夜行バス 5 時間、それもこれもまた
これを食べるためだったんだよ…」
「マルグッタのカレー!!!」

「うまいか？」

「あの、このあたりに
霊はいますか？」

「日本じゃ、そういうの
妖怪っていうんだ。」

「うむ…」

「…」

「おーい、澄江！
このあたりで
妖怪見たことあるか？」

「小島さんに聞いてみないとね。」

「電話してみる。」

「ご迷惑でしょうから、
それには及びません。」

「かわいそうに、
小島さんも馬場さんたちの
支配下か…」

「ひひ、こんにちは。」

「ああ！」

「小島さん、
お元気ですか？」

「ほら。」

「甘納豆。
ありがとうございます。」

「内野に狐がいたんだけど、
昔の話でね…」

「当時は…」

「私もまだ子供でね…」

小島さんの話

「よっと！」

(ピシャ)

「はあ」「はあ」「はあ」

「ふうー！
足が速いったら、
あのアマ！」

「？」

「よう、そこの子供！
赤い着物来た女が
走ってくるのみなかったか？」

「ねえねえ…」

「追いかけてるの、
ここに隠れていい？」

「まったく。川の方に行ったに違いない。」

「あのー…」

「行っちゃいましたよ。」

[吉田稲荷神社]
「ほんとに
狐だったと思う？」

「どうして追われていたのかも
わからないんだよ？」

「あのー？」

「どうしてそうだって
言えるのかな？」

「ここはきっと狐の住処なんだよ。」

「あっ、おにぎりだ！
おっきい！」

「ほら！」

「待って、
何撮ろうとしてるの？
もしそうだとすると、
そこにはいないよ！」

「おびき寄せるものを
見つけなくちゃ。」

「で、何がいいと思う？」

「いやー、どの具がいいんだろう？」

[シャケ] [トマトオムレツ] [チキンマヨ]
[ピザ] [海苔ごま] [カレー]

「もう、どれでもいいや。
狐は何でも食べるよ。」

「誰かに見られたら
怪しまれるね。」
「急いで！」

「うまういかないみたい。」

「シャケの方がよかったかな。」

「見て！」

「小島さんだ！」

「どう？ 狐出た？」

「小島さん、
お綺麗ですね。」
「狐はどのおにぎりの具が
好きか聞いて。」

「そりゃあ、塩にぎりだわよ。
でもいい新潟米で握らないとね。」
「スーパーで売ってるような、
機械で作ったまずいのじゃだめよ！」

「ふー、どうやって見つけたらいいの？」

「ついてるぞ！」

「これください！」

「ほんとに綺麗だ。
無駄にするより、
食べた方がいいんだろうな。」

「まだここ内野なのかな？」

そんなにたくさん歩いてないのに、
どの建物にも見覚えがない。」

「おーい！　ねえ、見つかった？」

「ああ、うん、
ちょっと古ぼけた感じの
小さい店にあった。」

「まあ、おいしそうだこと。」

「えい！」

「プチプチ」

「しーっ、あれを見なよ。」

「！」

「まだいると思う？」

「どうかな。」

別の道とおって帰ろう。」

「待って、さっきこっちへ行って

迷ったんだ。」

「こっちの道から帰ろう。」

「ああ。」

「消えちゃった。」

「そんな！

なくなってる！」

「でも遠回りだよ！」

「どうしよう？

撮った方がいいかな？」

「うーん、やってみなよ、

ダメもとで。

もしかしたら

昼寝してるのがいるかも。」

「あれ、小島さんどこ行った？」

「カチャ」

「知らない。

買い物じゃない？」

「平気だよ、散歩になる。」

写真8枚撮りの1枚目

鳥居参道
(狐たち)

内野
2014/9/18
天気 薄曇り

調整
露出 晴れ・曇り
焦点距離 ロングショット

「急いで、
乗り遅れちゃう！」

「ふうー、
ぎりぎりだ！」

「で？」

② 魔法の森

「3つ先だ。」

「楽しみ！
楽しみ！」

「期待しすぎないで。
もしいたとしても、本物の妖怪じゃないよ。
たぶん村のマスコットじゃないかな…」

「地図に描いてあるなら、
いるってこと！」

「このあたりは
まったく無人だね」

「見て、なんて綺麗なんだろう、
柿！」

「もう秋だね」

「ここ、さっき通らなかった？」

「ちょっと迷ったかもね。
どれも同じような道だから…」

「見て！」

「道を聞けるかな」

「え——、
アメリカ人!?!」

「ハロー!!!」

「えと、こんにちは。
私たちこの生き物を
探してるんです。」

「え——、かわいい！」

「ちょうかわいい！」

「わー、絵がお上手ですね！」

「これ、ぶるぶるくん！」

「こんなことだろうと思った…」

「このぶるぶる、
どこに住んでますか？」

「うーん、きっと古い森の中です。
この森のことで、お年寄りがいつも
変な物語を聞かせてくれるんですよ。」

「ちょっと魔法の森みたい。」

「魔法の森！
冗談でしょう？
で、ここから遠いんですか？」

「いいえ、すぐそこです。
あのスーパーの真裏。」

「あの、絵を描いて
もらえませんか？」
「写真を撮っても
いいですか？」
「私も！私も！」

「バイバイ！」
「疲れた…」

「さて、ここからは静かにね。
怖がらせないようにしないと。」

「えっと、森はどこ？」

「案内板がある」

「木を切って田んぼを作りました、
この「魔法の森ライス」は
すぐその食料品店で売ってます、だって。」

「なんだかちょっと残念だね…」

「なにやってるの？」
「写真撮るの。」
「でももう何もないよ。」

「いいの。」

「まあ、すくなくとも
景色はいいね。」

写真8枚撮りの2枚目

魔法の森

(ぶるぶる)

分水

2014/10/2

晴れ

調整：

露出 晴れ

焦点距離 遠景

「おー、セシル、オリヴィエ、
入れー。」

「すみません、
ちょっと疲れてるんです。
うちに帰ります。」
「いいから寄ってきなさい。」

「お茶入れてやるよ。」
「いえ、結構です。
すぐ行きますから。」
「何がそんなに
忙しかったんだ、今日は？」

③ 漂う世界

[おかしな1日だった。]

[始まりは早朝…]

「げえー、よく寝れなかった。
またゆうべ食べ過ぎたー。」

「あっ！妖怪！」

「窓から入ろうとしてる!!!」

「違うよ、蔵織の志賀さんだよ。」

「今日は何もすることがないんだろう、
おいで、いいところ連れてってやる。」

「でも、村上の
宵の竹灯籠まつりに
行こうと思ってたんですけど…」

「いいから、いいから！
あとで送ってやるよ。」

「建築家でギャラリーもやってますから、
志賀さんてすごく忙しいんですよね。
それなのによく私たちを
あちこち連れて行ってくれるんですよ。
神社とか、アートギャラリーとか、職人さんの工房とか…」

「で、閉まっているといつも
窓から入ろうとするんです！」

「ああうん、志賀さんて人は、
たいした人だよ。」

[今朝は、海と角田山の間の、くねくねと続く道を走った。
波に削られた岩々が見える。]

「で、右に見えるこの岩、
何の形に似てると思う？」

「えっと、わかりません。
速くてよく見えませんでした。」

「蟹だよ、大蟹の爪！」

「ああ… で、どうしてそれが
岩になったんですか？」

「ええ？ いやー、
ただそう見えるって話だよ。」

「何年か前に、政府がこの辺りに
原発つくろうとしてさ、
でも住民が反対して。」

「原発ってのは、
いいときは勤め口があって
いいんだけど、
でも少しでも何かあるとね…」

「ボン！で、地域一帯が
廃墟になるからね。」

「原発ってのは青白い光を出すそうだね、
まるで鬼火みたいな。鬼火ってのは、
青白い明かりで、幽霊が出る前触れなんだよ…
不吉な明かりだね。すれ違った人の精神を吸い込むんだ…」
「昔からいる怪物に替えて、
新しい怪物を創り出したんだな、我々は。」

「この山も守っていかなくちゃ
いけないんだ。いろんな逸話があるんだよ。」

「昔ここに有名なお坊さんがいてね。
良寛さんって名前だったんだけど。」
「おもしろい坊さんで、その人は。
全然お経を読まない。
子供と遊んだり、
木の下で酒を飲んでばかりいてね。」

「ここに住んでたんだ、この草庵に。」
「こうして史跡の日向に腰掛けて、
志賀さんはくつろいでいるように見えた。
しかし、何かが私たちの注意を引いた…」

[日差しの中に薄暗い一角。]

[小さな鬼の石像が私たちをじっと見つめていたのだ。]

[その瞬間から、何もかもが妙な感じになった。
私たちは村上に向かったのだが…]

[灯笼まつりは、まるで空気がひずんで
人や物がふるえているように見えた。]

[ぼんやりした人影の行列の中、
私たちは暗闇から妖怪が出てくるのが
見えるんじゃないかと思っていた。]

[人影がひとつ、集団から離れて、
私たちの方に向かってきた。]

[よく通る声で、
その人影は私たちに
こう言ったのだ…]

「どうした、
寝てるのか？」

「ここはのんびりできるから。
そうだろう？
我々を歓迎する気配を感じるよ。」

「俺ももっとちょくちょく
来なきゃだめだな。」

「向こうの方、
あの山の向こうはさ、」

「福島県だよ。」

「ああ…」

「見て。」

「光が金色だよ。」

「結局、灯籠まつりには行けなかったんです。
志賀さんに大事な電話が入って、
帰らなくちゃいけなくなって…」

「それでも、なんだかお祭りに行けたような感覚が
ぼんやりあるんです、なんとなく。」

「カレーおかわりやろうか？」

「ありがとうございます、
でもこれ以上入りません…」

「もう真っ暗だ。
時間が経ったなんて
気がつかなかった。」

「さあ、おいしいケーキも食べて。」

(ぽちゃん)

写真8枚撮りの3枚目

鬼の石像
(鬼火)

良寛の草庵
(弥彦と分水の間)

2014/10/13

快晴だが撮影は日陰

調整：

露出 曇り

焦点距離 バストショット

[秋の弥彦]

[紅葉を見に、いつもたくさんの
観光客がつめかける。]

④ 山の陰

[でもこの日は、
ほぼ無人だった…]

「紅葉、きれいだね。」

「山に登る前に何か食べた方が
いいかな、いい？」

「これ見た !?」

「このうどん、おいしいだろう。
なぜだか分かる？」

「どうぞ。天ぷらうどん2つ。」

「わー！」

「昔ながらのやり方で
麺を作ってるからね、」

「足で踏むんだよ。」

「いやほんとに、
こんなの街中じゃ
食べられないよ。」

「やあ、ずいぶん珍しいカメラ
持ってるね。」

「いい写真が撮れるんだろうね。」

「そうですね、
食感が独特ですね。」

「実は、あまりよく知らないんです。
これが初めてのフィルムなので。」

「日本の怪談では、
よく足がでてくるんだよ。」

「私たちを担ぐんですか？」

「古い家の中には、夜、
みんなが寝静まると、
大きくて泥だらけの足が
天井からどーんと降りてきて、
寝てる人を踏みつぶそうとするんだよ。
逃げようとしても無駄だよ。
そんなことしたら無残に死ぬこと
になるからね。」

「でも騒がずに、
足を洗ってやれば、
そいつは自分から行ってしまう。」

「なあ、足洗ってもらって、
嫌がる者はないからね？」

「このあたりには、有名な温泉が
いくつもあるんだよ。温泉好きなら
ぐるっと回ってみるといいよ。」

「で、妖怪は？」

「どこで見つかるかご存知ですか？」

「ついてきな。見せてやるよ。」

「おおー！」

「えっ、何？」

「いやはや、汁もぜんぶ
飲んじゃったね！」

「これ見てごらんよ、
おかみさん！」

「おや、そうだ、
最後の一滴まで平らげたね。」

「汁の何が問題なんだろうね？」

「とてもおいしかったです。」

「またいつでもおいで。」

「ほらこれ見てごらんよ！
蛸ケヤキだよ！」

「今は葉が茂ってるからよく見えないけど、
枝がまるで蛸の足みたいなんだ。
もしこんなのにしがみついたら、
もうお終いだよ！」

「ふー。おじさん、僕たちを連れて、
村の巨木めぐりでもしたいのかなあ？
これで4本目だよ！」

「でも正直言って、さっきの銀杏、
すごくきれいだった。」

「鳥居を見たかね？
この木はご神木なんだよ。
だから妖怪がいっぱいいるはずなんだ、
この中に。」

「早く、写真撮りなよ」
「えっと、ほんとですか？」
「ほんとだとも！」

「でも全部の木を写真に
撮るわけじゃないよ…
フィルムは1本しか
ないんだから。」

「大丈夫、
撮るふりだから。」

「おいで、」
「こっちに古い切り株があるんだよ、
回り道しても見る価値あるよ。」

「まるでこの世じゃないみたいだろう？」

「この穴、これ、よく見てごらん。
どこに続いているか分かる？」

「いえ。どこですか？」

「誰も知らないんだ。」

「やあ、いい考えがある。
俺を写真に撮ってくれよ、
神社の前で。」

「あ、いえ、妖怪しか撮らないんです。」

「まあいいじゃないか、
この俺が妖怪かもしれないよ。
さもないと、こんなこと全部
知らないだろう？」

「もしあなたが本当の妖怪だとしたら…」

「写真を撮ってくれとか言わないはずですよ。」

「いやあ、俺たちだって、
時代に合わせてるんだよ。」
「そうですか、わかりました。ほら！」

「ええ？ でもシャッター
押してないだろう。」
「押しました、押しました！」

「いや、押してない。
ちゃんと見てたからな。」

「じゃあ、もう1枚撮ります、お望みなら。」

「ここは、日が暮れると
妖怪で溢れるんだよ。」

「店の前に行列するんだよ。
もう大混雑だ。」

「妖怪って何食べてるんだろう…？」

「確かなのは、
このあたりの人は
日が暮れたらここに来ない
ってことだよ。」

「鍋の中もあっという間になくなるよ、ははは！」

「ぶるる…」

「でもまあ、頭を喰らう妖怪に
出くわす方がぞっとしないよ。」

「頭を喰らう妖怪！」

「ヒヒ、すてきなお話
ありがとうございます。」

「これから僕たち、
山に登って上から景色を
眺めようとしてるとこなんですけど。」

「ほんとか？ 登りがきついぞ。
俺と一緒に温泉に行くほうが
よくないか？
死人に見込まれたやつ知ってるぞ。」

「昼にたくさん食べましたら、
ちょっと運動した方がいいんです。」

「まあそう言うなら…」

「それじゃまた！」

「それと、もし後ろに人の歩く音がして、
振り返っても誰もいなかったら…」

「立ち止まって道をあけてやれ、
そうすれば大事ないから。
わかったか？」

「そうします！」

「ほんとだ、きつい…」

「おかしな人だったね！」
「ちょっとしつこかったしね。」

「いやまあ、気の毒な人だよ、
することなさそうだったし、
それだけだよ。」

「何て書いてあるの、ここ？」

「『飲まないでください』
って感じのことだよ。」

「でもコップは置いてあるんだね。
ありがたいよ。」

「ねえ、さっきのうどんだけど、
ほんとに足で踏んでると思う？」

「うん、きっとそうだよ。
いい味だったよね！」
「僕たちもやってみなくちゃ…」

「ぶるる、おかしな雰囲気だ。」

「暗くなってきたね。」

「ここは山の陰だからね。
まだ午後4時だよ。
日暮れまでまだ2、3時間
あるよ。」

「急いだ方がいいかな。」

「でももうへとへとだよー！」

「大丈夫、もしなら下りは
ロープウェイに乗ろう。」

「わああー！来た甲斐あったね！」

「このへん全部、見渡せるね、
山から海まで。」

「あ、もう山の上は雪だね。」

「どうだった、ロープウェイ？」

「高すぎ！」

「歩いておりよう。

日暮れ前に下山できるよ。」

「待って、登ってくるとき
たっぷり2時間はかかったよ、
でしょ？」

「その逆だから
もっと速いよ。」

(コリリリリコリリリリリ…)

「コリコリいう音、聞こえないない？」

「きれいだなー、佐渡。」

「頭を喰らう妖怪だと思う？」

(コリリリリ)

(フフフフシュウウウウウ　ウウウ…)

(フフフフフウ…)

(コリリリリ)

(ピチャ)

(ピチャ)
(ポチャ)
(ピチャ)

「どうした、何があったんだ？
真っ青だぞ。」

「お化けでも見たか？」

写真 8 枚撮りの 4 枚目
神社の前で
（帽子をかぶったおじいさん）

弥彦
2014/11/9
晴れだが撮影は森の中

調整：
露出 曇り
焦点距離 ロングショット

[ギャラリー蔵織]

「こんにちは。」

「やあ、来たね！」

「こっちへおいで
紹介してあげる。」

⑤ 二つの顔を持つ街

「こちら笹川さん。俺の友達でね。
古いものたくさん集めてるんだ。
家なんか本物の博物館みたいだよ。」

「最初はこの人、変わり者だなと
思ったけどね。でもあんたたちと
気があうと思うよ。」

「志賀さんから、あんたたちが妖怪に
興味があるって聞いてね。」

「写真に撮ろうとしてるんですけど…
でも今のところひとつも見てません。」

「ああ、そう簡単にはいかないよ。
見てごらん。」

「綺麗な女の人だろ？」

「でもこの握りを回すと、
顔を隠すんだ。
なぜだと思う？」

「回し続けて、
扇が閉じたら…」

「ほら化け物だ！」

「ということは、
妖怪は私たちの中に
隠れているってことですか？」

「森とか山とかを探していたけど、
でももしかしたら街の中にいて
人間と区別ができないのかも。」

「なんだ、考えすぎだよ。
こんなのただの古い玩具さ。」

「日本独特の
コレクション品なんだよ。」

「もっと他のものも見せてあげよう。この近くだよ。」

「ねえ、昨日変なことがあったんだ。
ゴミを出そうとしてるときにね」

「夕方で、通りには誰もいなかったんだ。
人っ子一人、車も通らなかった。
でも、道を渡ることができなかったんだよ。」

「まるで信号が青に変わるのを待つ間に
固まっちゃったみたいだったんだ…
で、いつまで続くのか分からないようなやつ。」

「それで、どうなったの？」

「いや、しばらくしたら信号が青に変わって、
渡ることができたんだ。」

「で、それが妖怪だったっていうわけ？」

「妖怪の中には目に見えない壁みたいなのがあって、
道を行く人の前に立ちはだかったりするんだ。
前に進もうとする限り、動けない。」

「そいつが道を開けてくれるまで、
辛抱して待たなきゃいけないんだ。」

「ふーん、
赤信号横断阻止する妖怪？」

「役所に
雇われてるんじゃないの？」

「着いたぞ！ここは19世紀の豪商の邸でね。
中也綺麗なんだけど、庭が面白いんだよ」

「ずいぶん楽しそうだね」
「私たちを連れ出すのは、
自分たちの散歩の
口実なんじゃない？」

「来てごらん」

「ここから見ると、
過去を通して現在を見てるような気がするよ。
二つの時代が対比されるみたいで。
ひょっとすると、妖怪にも
こんなふうに見えるのかもな？」

「昔は、月を見に大勢詰め掛けたものだよ。」
「でも今じゃ、夜は閉まっててね。」

「時代とともに、場所は役割を変える。
街には人が行かなくなった場所が
たくさんあるよ。そうした場所に、
妖怪が集まるんじゃないかな。」

「今夜は台風だから、もってこいだ。
街の至る所から集まってくる。
妖怪であふれかえるな！ははは」
「えっ！ 台風?!!」

「知らないのか？
ニュースじゃそればかりだぞ。」
「ああ、そうだ！降り出した。」

「ひどい。今や、僕たちのまわりは怪物だらけだ。
大きな目をして歯が生えてるやつ。」

「見て！」

「ねえほんとに…」

「うん！」

「ますますひどくなる！
なんて台風なんだ！」

[レストラン鳥の歌]

「さあ、あれを見せてやりなよ。」

「これはとても独特なカメラで、
目に見えない世界の生き物が
撮れるんです…」

「うーん、でも
まるで玩具だね…
軽い。」

「当たり前だよ。
プラスチック製だもの。」

「確かにこれは子供のものだよ。
見てごらん、
ここに持ち主の名前が彫ってある。」

「はは、一杯食わされたね！」
「待ってください…」
「マニュアルがあります。」

「ああそうだ、間違いない…」
「…こりゃ玩具だよ。」

「これ知ってる。」

「斧の中に睡蓮。」

「斧は下北半島だ。
気候の厳しいところで、
東北の北のはずれにあるんだ。」

「で、睡蓮は？」
「恐山だよ。恐れ of 山だ。」

「9 世紀に、
一人の坊さんが流れ着いて、
森の中で山々に囲まれた湖を
見つけたんだ。
まるで睡蓮の花びらみたいなの。」

「そこでその坊さんは、
寺を建てることにしたんだね。」

「日本の中でも 1、2 を争う
神秘的な場所だよ。
地獄の入口とも言うね。」

「死者と話ができるんだって。」

「送ってくださってありがとうございます。
でも…台風 of なか運転して大丈夫ですか？」

「もちろんだよ！
慣れてるから」

「あ of な、鳥 of 歌 of マスター of 言ったこと、
あんまり真に受けない方がいいよ。
あんたたちを感心させようとして
言ってるんだから。」

「でも、不思議なお話でした。」

「おおー、台風 of ことしゃべってる。
でかいやつだな！」
「えっ、車にテレビがある！」

「お願いします、
前見てください！」

写真8枚撮りの5枚目
小路の女性

新潟
古町

2014/11/20
夕方天候最悪（台風！）
調整：
露出 夜間
焦点距離 ロングショット

「まだ遠いと思う？」

「わからない。
この霧で何も見えないよ。」

⑥ はっきりしない水平線

「バスが止まった。
きっとここが終点だね。」

「ぶるる、まるで廃墟だね。」

「待って、
カメラ取りたい。」

「このあたりはどこも
壊れてるね。」

「なんて変な空気なんだろう。」

「いなくなっちゃった」

「家の周りを探して。
海の方探してみる。」

「海がすぐそこなんだね。」

「見て、子供がいる」

「あの子たちについていこう！」

「いなかった？」

「えっと…うん」

「おーい、お前たち！」

「そこで何してるんだ？
危ないんだぞ！」

「妖怪探してるんです。」

「このあたりにはもういないよ。
どっかいった。」

「みんないなくなった。
見ればわかるだろう。
お前たちもだぞ、
出て行った方がいい。」

「あなたは残ってるんですね。」

「聞いてないのか？
出て行け、早く！」

「バスを待とう。
しばらく来ないよ。」

「手遅れだ。
やつが来る！」

(ゴー！)

「バスじゃないね」

「なんて変な夢だ」

「ちゃんと写真撮った？」

「たぶん」

「バカみたいに寒いな…
吐く息が見える」

「でもまだ11月だよ。
冬までいなくてほんとによかった。」

「もうすぐ夜明けだ」

「台風は少し収まったよね？」

「北の方へ行っちゃった。
今日はきっと青空がみえるよ。」

「さて、来週どうする？
恐山に行く？」

「わからない。長い旅だね。」

写真8枚撮りの6枚目

夢
(水の怪物)

海辺の町
2014/11/20 夜

調整：
露出 晴れときどき曇り
焦点距離 遠景

[北へ向かう私たちの旅は
丸1日ばかりだった。]

[翌日、朝早く、
私たちを乗せたバスは
薄暗い森を抜けて進んだ。]

[苔むした小さな石像たちが
静かに私たちを見つめていた。]

⑦ 地蔵の袖

[着いた：恐れ of 山だ…]

「うーっ！匂わない？
腐った卵の匂い。」

「硫黄の臭気だね」

(カー)

「カメラを売ってるって雰囲気じゃないな」

「さてここが、蓮の花弁か」

「夢みたいだ！そいつで写真を撮
撮ってるんですか？」

「なんて入り口だ」

「このカメラを知ってるんですか？」

「うちにありますよ、
段ボールの中に。
でももう動かなくて。」

「この手のもののなかでは
独特のカメラだって聞いたんですけど。」

「ええ？それが？ぜんぜん！
プラスチックの玩具ですよ。
写真はちょっとピンボケだけど、
でも子供は喜びます。」

「ああ、そうですか…」

「見てください。」

「まあ、傑作というわけじゃ
ありませんが…」

「あなたたちは写真がお上手なんでしょうね。」

「いえそれでも」

「ちょっと待っててください。
戻ってきます。」

「とうもろこしはお好きですか？」

「ええ、はい！」

「じゃあ、食べてください！
ここは辛いところですから…
力をつけないと。」
「どうも。」

「いい写真を撮ってくださいね！」

「思い出はだいじですから。」

「彼、最近、子供を亡くしたんです。
私たち、その子のために来たんです。」

「お気の毒に。」

「みんなここに何しに来るか、
知ってますか？
観光じゃないですよ…」

「ここにたくさん子供の像があるの、
わかります？」

「カラフルな玩具とか
うち捨てられてて、
陰気な眺めですよね」

「カラスが食べ物を
奪い合ってて…
鳴声が聞こえて…」

「こんな場所に、
本当に慰めがあるんでしょうか？」

「煙の中に人がゆらゆらと見えますね。
みんな、子供が大好きなお菓子を
備えていくんですよ。」
「お気に入りの玩具とか。」

「見ましたか？
わらじまであるでしょ…？
中にはすごく小さいのまであって、
もう少しで泣き崩れそうになりました。」

「彼は、着いた時は不安そうでした。
ずっと黙ってたんです。
いまは少しはいいみたい。」

「しかもあなたたちに話しかけましたし。
そのカメラのせいですよ、でしょ？
なんて偶然…」

「おい、かおり！
行こうか？」

「行かなくちゃ。
どうぞお気をつけて。」

「あまりここに長居しないほうが
いいですよ。
何が起るかわかりませんから。」

「探していた答えが
見つかったのかも…」

「みんな、たいしたことじゃ
ないよ、結局。」

「最後の1枚を撮って、
出発しようか？」

「あまり遠くに行かないでね！」

「けいこちゃん…」

(チリン)

(チリン)

「そのあなた、
ついてきてください」

「私は毎日ここに来るんですよ。
理由があるんです。」

「小さな像が来ている着物、
これ私が作っているんですよ。」

「どうして石像に
着物を着せるかわかりますか？」

「幼くして死んだ子供は成仏できないんですよ。」

「あの世へ行けないんです。」

「でも成仏できないでいるのは子供だけじゃないんです。
獣がいて、子供達を追い詰めて
頭から食べてしまうんだそうですよ。」
「犬みたいな獣です。」

「お地蔵さまはここで
子供達を守っているんです。」

「子供達はお地蔵さまの
着物の襷の中に隠れて、
難を逃れることが
できるんです。」

「もし夕方までここにいるなら、
たぶん、あなたも、
その獣を見るでしょうね。」

(チリン)

(チリン)

(チリン)

(チリン)

(カワ)

(カワ)

「ぶるる、遅くなったな…
最終バスに
乗り遅れないようにしないと。」

「でも、セシルどこへ行ったんだろう？」

(カー)

「あ！」

「どこにいたの？
さんざん探したんだよ！」

「ねえ、聞してる？
バスに乗り遅れちゃうよ。
行かなくちゃ。」

「え？ 何？」

「言っとくけど、
僕、ここで夜を過ごさないからね。」

「待って、私のカメラ！」

「ないの？ 何してたの？」

「わかんない」

「よく思い出して！
どこかに置いてきたんじゃない？」

「ううん、違うと思う。
写真を撮って、この硫黄の池まで
歩いてきたの、大仏の裏の…
さっき、会ったところまで。」

「カメラずっと持ってたんだから。」

「よし、あわてないで。
バスのところに行って、
運転手に待ってもらうように言って。
見てくるから。」

「あと1分待ってください。
お願いします。」

「あっ、来ました！
待ってくれてありがとう
ございます。」

「見つからなかった？」

「さんざん探したけど暗くて。
ごめんね。」

「ううん、いいよ。
どうせつまらない
ものだから…」

「写真を見たって、
がっかりしたに決まってる」

[恐山から帰る途中…]

[がたがたと夜を抜けて走る
バスの中で…]

(チリン)

[私たちの旅が終わりに近づいていることに
気がついたのだった。]

写真8枚撮りの7枚目

恐れ of 山（影たち）

恐山

2014/11/26

曇り

調整：

露出 曇り

焦点距離 遠景

①【左ページの左側】

マルグッタでの最後の食事。小島さんにまた会えてよかった。
「きれいな着物に限って虫が喰うんだから、やんなっちゃうわよね！」

②【左ページの右側】

「セシル、太ったな」
「誰のせい?!」
少し悲しいけどでも

③【右ページの左側】

2014年12月1日
鳥の歌にて：高倉健追悼上映会（先月死去）。マスターは、高倉健の出世作のヤクザ映画をかけた。店内はお年寄りばかり…でも皆、子供みたいに歌っている。

人のいい酔っ払いのおじさんに「変な」ブレスレットをもらう。

志賀さんとの別れは短いものだった。だって志賀さんが映画を見るに店内に戻っちゃったから。感動しすぎ。

④【右ページの左側】

今日は車で送ってもらえますか？
「じゃ！」

[私たちが発ってまもなく、
新潟には雪が降り始めた。
フランスへ向かう飛行機の中、
後に残った人たちには厳しく
果てしない冬が始まったのだと
考えていた。]

[そこでは、凍てつく風が絶え間なく吹き、
家々の中にまで吹き込んでくるのだ。]

[数ヶ月過ごした日本の思い出が、
すでに私の中でぐるぐる巡っていた。]

①***** ②***** ③***** ④*****

[カメラをなくした時、
夢から覚めたような気がした。]

[いまではより一層現実に戻って、
シベリア上空を飛びながら、
私たちの旅路はあんなにも遠く、
まるでまぼろしのよう思えた。]

[恐山で何があったんだろう。
あの硫黄の池の近くで、
私を往放心状態にさせたものは
何だったんだろう？]

「Tea or coffee？」
「Tea, please.」

「あっ、見て！
あのフィルムだ…
あのカメラと一緒に
なくしたと思っていたやつだ。」

「どうしてそこにあるの？」

「知らない」

[のちに、フィルムを現像して、
私が撮ったコマのあとに
8番目の写真を見出すことになる]

「!!!」

[これは私が撮ったのだろうか？
場所には見覚えがない。]

[私たちは本当に、目には見えない精霊たちに
囲まれているのだろうか？]

[私はフィルムをポケットに押し込んで
目を閉じた。機内にはかすかな
硫黄の匂いが漂っていた。]

写真8枚撮りの8枚目

もう一つの世界
(謎の写真)

場所 不明
日付 //

調整：
？

[妖怪狩り日誌]

[新潟県地図]

[旅の思い出]

[妖怪写真の現像]
「フィルムで捉えた妖怪の像はと
ても繊細です。慎重に行いましょ
う。」

[フィルムは光に当てないように、
暗室に入ってから、フィルムを気
密性の高い缶に入れて蓋を閉めま
す。]

[ふつうなら、写真家はフィルム
を化学薬品の入った桶に浸します。
ですが、妖怪はこの匂いがダメな
のでフィルムから逃げてしまうか
もしれません。]

[よって、別の方法を使います：
カフェノルです。]
ビタミン C
インスタントコーヒー
炭酸ナトリウム

「ヘルプ！」

[溶液を缶に入れて 10 回まわし
たら、1 時間待ってから液を洗い
流してフィルムを定着させます。
妖怪はこれが大好きです。]

[できました：現像の完成です。
これでフィルムを日光に当てて、
結果を見てみましょう。]
「うーん…」

「ねえ、マスター、
エスプレッソくらさい！」

【プリント】
「プリントするにも、同じ問題が発生します：ふつうの引き伸ばし機は使えないのです。」
「妖怪は電気の光に敏感です。電気は写真から妖怪の像を消してしまうかもしれません。」

「よって、とても古い方法を用います。日光写真です。これは写真技術の起源にさかのぼるもので、太陽光にあてて直接写真を焼き付けることができるのです。」
【ジョン・ハーシェル】 1842 年

「乾いたら、ネガと紙をガラス板に挟んで、ネガを紙に押し付けます。」

「そして日光に当てます。紫外線効果により、溶液はネガで覆われていない部分で黒くなります。」

「まずネガをスキャンして、OHPに大きく転写します。」

「この段階でも、ネガには妖怪の像が現れません。しかしまったく心配はありません。」

「最適な露出時間を計るには、何度か試してみる必要があります」
夏の日差しでおよそ 1 時間 30 分です

「次に、急いで、しかし丁寧に紙を水に浸して取り外し、化学反応を止めます。さらに少し酢を足して細部を際立たせます。」

「日光を避けて、クエン酸鉄アンモニウム、フェリシアン化カリウム、および精製水を混ぜ合わせます…」

「この溶液をネガ全面に丁寧に塗り付け、暗室に置いて乾かします。」

「さあこの通り、見事な妖怪ポートレイトができました。」

「ちょっと不思議なやり方ですけど、でもうまくいきますよ。」

「あー、
捕まっちゃった！」

「やってみてください！」

用語集

妖怪

超自然的存在。人間にいたずらするのを好む。

おにぎり

お米をお団子に丸めて普通は海苔で巻いたもの。

鬼火

リンが燃えることによって発生するぼんやりとした火で、妖怪を先導すると言われている。

天ぶらうどん

揚げ物と小麦粉の太麺を、汁に入れて食べるもの。

円

日本の通貨。1,000 円でだいたい9 ユーロ。

地蔵

菩薩をかたどった小像。子供の庇護者として信仰されている。

鳥居

人間世界と精霊の住む世界の境界を象徴する門。

温泉

自然の源泉に作られた温泉風呂。

田舎道の際や神社の影に隠れて、日本の精霊たち、狐や狸、その他の妖怪たちは、いたずらしてやろうと道に迷った旅人を待ち構えている。セシルとオリヴィエは、新潟の日本海の近くに新たに居を構え、フィルムにこれら妖怪を写すとされるちょっと変わった中古カメラを買う。写真に撮ろうと追いかけるうちに、この世とあの世を行き来するもうひとつの日本の姿を描いていく。

著者紹介

アトリエ銭湯は、セシル ブランとオリヴィエ ピシャール、この2人のアーティストによる作家集団で、日本旅行をきっかけに誕生した。日出ずる処で出会った人々、描いたデッサンや撮った写真がグループ結成の契機となっている。彼らの活動は、ありふれたイメージから離れて、誰も知らない日本の姿を紹介することにある。山々の中に隠された村や、庶民のお祭り、あるいは忘れられた精霊たちによって形作られる日本である。

日本語訳 駒形千夏